

アメリカにおける多文化教育の歴史と現代的課題

ゲロリア L. ピンクス
加藤幸次・武内 清 訳

今日は、アメリカにおける教育についての考え方の一つである多文化教育 (Multicultural Education) についてお話しします。多文化教育という考え方の出てきた歴史的経緯からお話ししましょう。多文化教育という言葉が教育学の文脈で使われるようになったのは1970年代です。しかし、それ以前にそのような考え方をする土壌が生まれていました。

1940年代つまり第2次世界大戦が終わって、さまざまな人種や民族からなるアメリカ兵が本国に帰還して来ました。しかし彼らにはアメリカ人としての市民権が与えられていませんでした。そこでアメリカの憲法を踏まえて彼らに市民権を与えるという気運が高まりました。時は冷戦時代で、共産主義が台頭した時代です。

1954年に、最高裁の「ブラウン裁判」がなされました。この判決の内容はそれまで長い間保たれてきた判決をくつがえすもので、「人種別の扱いが平等ではない」(Separates is not equal) というものでした。どの人種の子どもも近隣の学校に行く権利があるという判決が初めて下されたのです。

1960年代になると、公民権運動が起こりました。マーチン・ルーサー・キング、マルコムX等の名前が思い浮かぶことでしょう。同時にベトナム反戦運動や女性解放運動が起こりました。そして大学のキヤンパスでは、黒人研究、アジア研究、アメリカンインディアン研究、女性学 (Women's studies) といった新しい科目が開講されるようになりました。そして1970年代にそれらに共通する多文化教育の概念が生まれました。

多文化教育は1945年から50年代に盛んになった「人種間教育運動」(Intergroup Educational Movement) とは異なるものです。「人種間教育運動」は白人以外の人種がいかに白人のようになるかや白人社会に適応する方法が探索されました。それに対して、多文化教育はすべて人が対等にカリキュラムの構成に参加し国の発展に与ることができるように企画されたのです。当時、多文化教育の研究に携わった重要な人物はJ. バンクス、C. グラント、G. グレイ、C. コルマス、A. ベーカーです。

ここではJ. バンクスの考えを使って説明しましょう。J. バンクスは多文化教育には5つの次元があると述べています。第1は内容統合の次元です。これは教師がカリキュラムの中で他の文化の例を取り上げ、その文化への理解を深める方法を問題にします。

その内容統合の次元には4つのアプローチがあります。第1はトピックアプローチ。これはいろいろな国の祝日やヒーローを取り上げるもので表面的なものです。たとえば日本の「子どもの日」について取り上げるようなことです。第2のレベルは付加的アプローチと呼ばれるものです。これは教師が通常のカリキュラムを変えずに、一つの単元として例えば日本について教

えるようなことです。第3はバンクスが「プロローグ」と呼ぶもので、専断的政治的視点から戦間や政治的動向について教えます。それに対して拡張アプローチでは、「第2次世界大戦を多様な視点から見てみよう」と述べた女性性の視点から、黒人の視点から、日系アメリカ人の視点から、メキシコ人の視点から」と問題提起します。アメリカではこの方法で教えることの出来る教師はごく少数です。第4はバンクスが「社会的行動的アプローチ」と呼ぶものです。その例として、1989年にシリアル・ド・黒松が第2次世界大戦中の日系アメリカ人の強制収容所への拘束に対して政府に謝罪を求めた訴訟を扱いました。学生達が当時の歴史を研究し、責任の所在を明かにし訴訟を支援した運動があげられます。これらはまだ理想です。なぜなら今でも大学においても第1のアプローチの水準で働いています。スタンフォード大学でも同じレベルで大きな戦いがあります。

第2は「知識の構築」(Knowledge Construction) 次元です。これは研究者としての私にとって身近な分野です。なぜなら、知識の物差しが何であるかがその学問の性格を定めます。またそれは社会的構築されたもので、心理学者がどのようにそれを構築したかが問われます。別の例をあげれば、第2次世界大戦の歴史を取り上げる時、アメリカ、日本、ドイツそれぞれの立場から見ます。その史実を理解する時、誰がどのように知識を構築したかが問題とされます。もう一つ例をあげれば、フェミニズムは知識の構築にインパクトを与えました。フェミニズムは「ソングダー規範は重要なものか」と問います。

第3の次元は公正教育学 (Equity Pedagogy) です。私自身の研究はこの次元に入っています。すべての生徒が平等に学ぶ機会を得られるように、いかに教師は授業を組み立てているかを問題にしているからです。公正教育学の例として、カリフォルニア大学バークレー校のトリス・マクニッシュによる機械工学専攻の学生に対する数学のクラスがあります。教授は北京語を話す中国系学生とアジア系アメリカ人の学生の成績の違いに気が付きました。中国系学生は全員学習グループに入っていたのに、アジア系アメリカ人の学生は誰も学習グループに入っていないのでした。そこで公正教育学は、すべての学生が学習グループに入るべきかを問題にします。もう一つの例は、我々が「共同学習」(Co-operative Learning) と呼ぶものの革新です。共同学習は生徒が問題を解く学ぶたにお互いに助け合うように企画されています。たとえば、教師は4人5人ずつの生徒のグループをつくり、それぞれのグループに部分的なヒント (情報) を与えます。生徒達はそれらの情報を持ち寄って答えを出すために集まるようになります。アメリカの学校で頭の良い子は共同学習が嫌いだということも付け加えておきます。

第4の次元は偏見縮小 (Prejudice Reduction) です。アメリカの学校では、皮膚の色、宗教、言語、ジェンダーの違いによって、生徒の扱われ方が違います。アメリカ社会のなかで一番偏見を受けているのは白人、プロテスタント、英語を話す人、男性です。たとえ彼らは学校で成績優秀でなくとも、良い学生として扱われます。アメリカの学校で一番成績が良いのは、中国、日本、(第1次移民の) ベトナムといったアジア系アメリカ人です。しかし、アジア系アメリカ人は社会に出るとき一番いい仕事には就けません。したがって生徒が異なった人々に対して偏見をもったり見下したりしないようにするのが、偏見縮小の目的です。

第5の次元は学校文化の強化 (Empowering School Culture) の次元です。ここで意味するところは、学級を越えて学校全体がこの多文化教育の次元を反映していく方法を考えなくてはいけないということです。

アメリカの学校が多文化教育のモデルに変わっているか、変われば、私は「いいえ」と答えるを得ません。学校は人口的には急激に変化しているのに、教師の多くはその自覚がありません。例としてカリフォルニアの人口統計の変化をあげてみましょう。1976年にカリフォルニアでは76%が白人でしたが、今はその割合は7%に減少しています。大きな変化がおきているのです。サントフェルビスの公立学校において白人はわずか17%です。最大のグループは中国系です。ロサンゼルスで最大のグループはメキシコ系アメリカ人です。アメリカの250大学区のうち21学区において、生徒の多数はアジア系アメリカ人です。

我々が多文化教育に向けて努力する主な理由は、それらのさまざまなグループの学業成績に大きな差があるからです。したがって、いま多文化教育は大いに必要とされています。しかし、我々の大学や教員養成プログラムには能力の限界があり、理想のレベルに達していません。

授業の記録 (12月1日、多文化教育について)

授業日 2017年12月1日 作原 幸 (tsukagawa)

本日 (12月1日) の敬愛大学での授業 (教育課程論) のリアクション項目と配布資料を掲載しておく。
テキスト (『教育の基礎と展開』の10章を読んでレポートを提出するように課題 (宿題) を出しておいた。

- 1 井上茂先生 (英語の教職について) のお話についての感想
 - 2 前回 (ジェンダーと教育) に関する討論の感想
 - 3 テキスト 第10章 (多文化共生と教育) で、提言されていること
 - 4 多文化教育のエッセンスは何か (松尾、佐藤参照)
 - 5 なぜ 異民族排斥、ヘイトスピーチが起こるのか (配布プリント参照)
 - 6 なぜ 国際理解が困難なのか、それを克服する方法は (「教育の国際性ってなぜ必要なの」参照)
- 次週への課題 佐藤部署 「多国籍化する学校」 (配布プリント) を読んでおくこと

英語に関しては、教員採用試験で小学校の免許だけでなく中学校の英語の免許を持っていると採用に有利になる (千葉の小学校の教職の採用枠に中高の英語の免許を持っているものには別枠の採用がある為) という貴重な情報も提供された。それと同時に教育学の立場からすると、「なぜ英語を学ぶのか」「英語は汎用的な言語 (世界共通語) といえるのか。そこに文化的偏りはあるのか」なども考える必要があると説明した。

多文化教育や異文化間教育的視点、単一文化的視点 (マルチエングボット) や比較文化的視点 (旅行アプローチ) とは違い、マイノリティ (弱者) の立場に立ち考えることであること。またバリエーションも異文化 (バイオリテラー) とまじわることにより自分達も豊かになるという意識をもつ視点であること。またバリエーションも異文化 (バイオリテラー) とまじわることにより自分達も豊かになるという意識をもつ視点であること。またバリエーションも異文化 (バイオリテラー) とまじわることにより自分達も豊かになるという意識をもつ視点であること。

経済がグローバル化する中で、国を超えた物的交流が起こることは必然であり、他者 (当たり前を共有しない人) との関係築き、「不快さに耐える」ことが必要という論 (藤井) を読んでほしい、多文化教育を、理想だけでなく、現実のものとして考える時、どのような問題が出てくるかを説明した。

配布資料

IMG_20171212_001naku

リアクション&中間レポート

IMG_20171203_0001

都会のイルミネーション

撮影日 2017年12月9日 作原 幸 (tsukagawa)

昨日 (5日)、新宿のホテルで開かれた会で、地方の人口減少のことが話題になっていたが、それと対照的に新宿の街には人があふれていた。

また、年末の都会 (新宿) のイルミネーションも綺麗。人も少なく店も明かりもない地方から、若い人が明るい都会に魅かれ、移動するのも必然かと感じた。



カネコリー 芸術団 (ニードル)

敬愛大学国際研究第30号について (その2)

掲載日 2017年11月25日 作原 幸 (tsukagawa)

大学の紀要は、読む人が少ないと書いたが、実際は読んでみると面白い。

最近出された敬愛大学国際研究30号には、中東問題の研究で有名な水口章教授や、西郷研究で第1人者の畑中千晶教授が、自分の専門分野の論文を書いてくれた。また、理科教育が担当の田口功教授は簡易顕微鏡の作成方法を具体的に書いて興味深い。さらにドイッ中・近都市史専門の山本健教授の「商人ブルカット・チンク (1396-1462年) の自伝的邦訳」がすばる面白い。この時代の商人の生活が生き生きと描かれていて感心した (結婚を4度し、子どもも多、この時代が子供も死に率が高くて高いなど)。

教育学、哲学、英語専攻の佐藤和俊講師が、高野・武内編『教育の基礎と展開』(学文社、2016年) の書評を書いて下さり、それに関連する内容に関する興味深いことを書かれている。

それは、哲学者の観見後編が若い時、ヘンクレーに会い、彼女のunlearn という言葉を、「学びほぐす」という意味に解釈し、それは、「型どおりにセクターを編み、ほどこいて元の毛糸に戻して自分の体に合わせて編みなおす」ことと説明している、という興味深いエピソードの紹介である。

「私たちは各自の実践と突き合わせながら、気が付かないうちに固定概念となっている見方や考え方について解きほぐす (ことが大事)」と佐藤氏は説明している。

そして、高野・武内編の本について、「本書には、基本知識の習得のほか、意見、自明と思われがちな教育・保育に関わる事象について、読者が学びほぐす工夫がちりばめられている」と評価してくれている。

私は好意的な書評をお礼を申し上げ、下記のようなメールを佐藤氏に送った。

「佐藤さんの書かれたunlearn=学びほぐす というのは、なかなか含蓄があり、面白いと思いました。昔母がよく、毛糸をほどこいて新たにその毛糸で別のものを編んでいたことを思い出しました。ただ、今の世代では、使っ捨ての時代ですから、それは実感としてわかっていないかもしれません。

(教育社会学の立場は) 「われわれが生きている社会を相対化してみる」と竹内洋氏が言っているのを、私は引用しましたが (紀要30号128頁)、これと学びほぐすは、同じことなのか、どうかいろいろ考えさせられました。

常識を疑うというのは、哲学者もそうだと思いますが、社会学も同じだと思います。教育に関しては、常識的なことはかなり重視されるので、教育社会学はそれを一度疑ってみようというスタンスをとるようになります。

ただ、それは理論を実践の中で検証するというよりは、(実践自体がその時代の常識によって行われていることが多い為)、この起源から考えたり (歴史学的視点)、他の国の例から考えたり (比較的視点) するようになります。」

“unlearning”について

掲載日 2017年12月9日 作原 幸 (tsukagawa)

先の紹介した“unlearning”は有名なことばらしく、いろいろなところで使われている。目についてものを2つ挙げておく。

< unlearning とは、それまでの限られた経験から体得してきたことをいったん解体して、一から組み立て直すことと言える。この営みに欠かせないのは、自分と異なる背景や違った価値観を持つ人々、すなわち異質な他者の存在である。大学入学後に高校までとは比べものにならないほど多種多様な人々と出会い、「目から鱗」体験を重ねた人は、少なくないであろう (日比谷 輝子 「unlearning」めざして—大学の国際化の意義』『IDE 現代の高等教育』596号、2017年12月、p 9)

< “unlearning”のすすめは、学びの否定ではありません。「すでに学んだこと、とくに悪いことなどを、あえて忘れる」。ここで重要なのは、“unlearn”の前に“learn”がなければならぬ、という点です。「すでに学んだこと」なしに、「あえて忘れる」などできませんから、つまり“unlearning”のすすめには、大学入学までじっくりと学んできてください、という願いがまぎれは込められています。

本橋哲也は、“unlearning”の意味を次のように記しています——「学ぶことによって自分の特権を解体し、他者に対する偏見を解きほぐす」。つまり自分の依つて立つところを見つめ直して「他者」との共生を探るような「学び」を、“unlearning”として提唱しています。“unlearning”とは、「進い」とともに生きるための倫理です。(木下 誠http://www.seijo.ac.jp/education/falit/seijo-olunn/os/index.html)

教育課程論(12月8日)リアクション 多文化教育について(その2)

番号 名前

1 前回(12月1日)のリアクションに関する感想

国際化に伴い、英語の勉強が強く推し進められている現状で、私やあつ真剣に取組んでいかないと、差し違えたり何かいかに思ふ。お上先生の話から、自身の将来と見ると見ると、その英語に取組んでいこう。

2 テキスト10章の要約(例)を読んだ感想

皆、広い視野で様々な観点から、良い方向へ導くように、可能性を探って感じました。どの考えも納得させられるものばかりで、1つの課題に対して、固定観念に打ち負かすために、「unlearning」は重要で、柔軟な発想が可能になると分りました。

3 unlearning とは何か。異文化理解や多文化教育とどのような関係があるのか

既に学んできたこと(learn)を一度解体し、一から組み立て直すこと。これには、自分と異なる背景や価値感を持つ人々(異質(他者)が必要。偏見と解きほぐし、他者との違いと共生する。

4 転換アプローチ(バンクス、ピリングス)とは、何か。

火消しに走り回るのはなく、何が本当か、解決すべき問題かを考えたり、問題の定着を変えることで、仕組みを解決していかないと。

5 広島・長崎への原爆投下に対する見方を、日本(人)の立場と、アメリカ(人)の立場から書きなさい(転換アプローチの応用問題)

米: 避けられない。戦争を終わらせるために最も効果的の手段(これは異文化理解(10月)日本)日本の特殊性やカミカゼが 米国では学ばれており、原爆投下は1つの手段として善悪が不明。愛国主義の現れから、長考する必要のないものと都合よく無効なことにされた。その後、米国は原爆の被害を公開し、学校で議論する。原爆投下の絶対必要か? 原爆が戦争に直接関係したか? 日: 改めて被害者の視点を中心に語らなくてはならず、その前後の経緯は知られていない。その被害の大きさ、平和教育が行われていない。日本では被害者も無罪という認識もあり、実際に広島を訪れて視野を広げ、議論を展開する。

教育課程論(12月8日)リアクション 多文化教育について(その2)

番号 名前

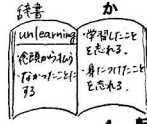
1 前回(12月1日)のリアクションに関する感想

6a 国際理解が困難なのか、それを克服する方法は...とこの辺り色々な意見があったので。

2 テキスト10章の要約(例)を読んだ感想

多文化の共生は難しいことかもしれないが、文化的な多様性を重視するのではなく、個人を尊重し合うことが大切なことだと思う。また、個人を尊重する気持ちをはぐむためには、もっと社会のことや世界に関心を持って向き合うことが必要だ。

3 unlearning とは何か。異文化理解や多文化教育とどのような関係があるのか



「学びほぐす」という意味に解釈する。学習の否定ではなく、自分の依り立つところを見つめかき捨て、「他者」との共生を探求する。学習を提唱している。unlearningは「正しい」を捨てるための倫理。

4 転換アプローチ(バンクス、ピリングス)とは、何か。

多様な視点から問題を考察する。考え方や、視点を立てて考え(これ)で、それぞれを立てて見ることが必要。

5 広島・長崎への原爆投下に対する見方を、日本(人)の立場と、アメリカ(人)の立場から書きなさい(転換アプローチの応用問題)

日本人: 日本は被害者意識が強い、日本人もアメリカ人を殺した。原爆を落とすことは、必要があった。人間がすることではない、言葉にできない。アメリカ人: 戦争をおわらせるきっかけになった。日本人は天皇のために命をささげていることを加害者として、戦争を早くおわらせるには原爆を落とすことが必要だった。原爆を落とす前には終戦に向けていることがあったのではないかと。人体におよぼす影響を知ることによって終戦を促せることになったのではないかと。

教育課程論(12月8日)リアクション 多文化教育について(その2)

番号 名前

1 前回(12月1日)のリアクションに関する感想

みんな異なる文化や習慣が同居する社会でストレスや不安は受け入れなければならない、他者に対する理解を認め、それに基づいて不快に感じることを大事だと考えていることがわかりました。

2 テキスト10章の要約(例)を読んだ感想

文化的な差異に関係なく、たれも「ありのままに生かされる社会」とは、とても素晴らしい、目標としてよいことだが、完全な実現は難しいと思う。そのためにも、教師はとても大事な存在であるため、英語教員になりたいと思う。

3 unlearning とは何か。異文化理解や多文化教育とどのような関係があるのか

unlearningとは「学びほぐす」。固定観念をひきおいて見る見方や考え方を解きほぐす。これまでの限りから経験から体得してきたことをいかに解体して一から組み立て直すこと。unlearningに見れば、自分と異なる背景や価値観を持つ人々、異なる他者の存在。

4 転換アプローチ(バンクス、ピリングス)とは、何か。

物事を多様な視点から見ることを述べ、女性の視点から、黒人の視点から、日系アメリカ人の視点から、メキシコの視点からなど、問題を提起すること。アメリカではこの方法で教えることの出来る教師はごく少数。

5 広島・長崎への原爆投下に対する見方を、日本(人)の立場と、アメリカ(人)の立場から書きなさい(転換アプローチの応用問題)

日本(人)の立場: 広島・長崎への原爆投下は戦争を終わらせる唯一の方法があったはず。原爆を落とすのが戦争の終結の課題。原爆投下は戦争を終わらせる必要。原爆の立場から見る。教科書だけでなく自分で考えたい。アメリカ(人)の立場: 原爆が戦争を終わらせた。真珠湾からはじまったのだから、自衛自衛のよけは考えがみられる。原爆による戦争が終わり、多くの命が救われた。変化: 疑問をいれることで生々しく思われる。前後の「まじ」とも書かれる。SPHL: 原爆について語りだすのがいい。アメリカで公開になった映像を流す。イベントを行う。

教育課程論(12月8日)リアクション 多文化教育について(その2)

番号 名前

1 前回(12月1日)のリアクションに関する感想

自分と同じように英語について書いている人が多かった。多文化教育の考え方もそれぞれで、いろいろな見方があり、興味がある人もあった。

2 テキスト10章の要約(例)を読んだ感想

教師は視野が広いほうがいいという人が多そうである。自分はそんなに視野が広かたし、考えの幅が狭いと思うので、4年間の内に身につけないといけないなという危機感を感じた。

3 unlearning とは何か。異文化理解や多文化教育とどのような関係があるのか

unlearningとは「学びほぐす」。異文化及び多文化に対する固定観念や見方を変え、違いを理解し合うのに必要。固定観念をひきおいて見る見方を解きほぐす。倫理が「unlearning」である。

4 転換アプローチ(バンクス、ピリングス)とは、何か。

1つのものを自分以外はどう考えるかというのを提起し、いろいろな視点から考えて他人の考え方を理解する事であると思う。

5 広島・長崎への原爆投下に対する見方を、日本(人)の立場と、アメリカ(人)の立場から書きなさい(転換アプローチの応用問題)

日本: 落とされたので被害者という考えが多く、被害者意識が強く悲惨な結果となつたため、アメリカが悪いと考え、戦争を終わらせる判断が困難である。アメリカ人であろうと日本人であろうと、戦争の相手を間違えなければ、人の命は皆変わらな平等であるはず。アメリカも日本と同じで、自国民の命が大変である。国民を救う1つの手段にすぎない。アメリカ: アメリカは戦争を終わらせるために、とても多くのアメリカ人の命を守るために原爆を投下したため、アメリカの判断は間違っていない。先に奇襲したのは日本であり、戦争の相手を間違えなければ、人の命は皆変わらな平等であるはず。アメリカも日本と同じで、自国民の命が大変である。国民を救う1つの手段にすぎない。